



2001-1-2

# 大学入試制度

## 今週の「異議あり」



東工大大学院 橋爪大三郎 教授

はしづめ だいさぶろう 1948年、神奈川県生まれ。77年、東京工科大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。著書に「はじめての構造主義」(講談社現代新書)、「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)、「選択・責任・連帯の教育改革/完全版」(勁草書房、共編著)などがある。

に要求すべき学力・知識のレベルを独自に設定し、公表する。入試が廃止されれば、単に入学したた

けでは社会的評価がまったく得られぬし、学生側に見れば進級や卒業ができれば学費の払

い損になります。そうなれば、自分のレベルから離れた大学にはそもそも入学しようと思わなくなるでしょう。もうひとつ、入学者を適正な人数に抑える方法は奨学金と奨学ローンの活用です。

行が引き受けるかという疑問もあるでしょうが、死亡や破産など個々の貧し倒れのケースは大学がまとめて保証し、必要なら国が債務保証すれば、銀行が引き受けられない理由はないでしょう。こうしたシステムを実現すれば、学生に責任感が生まれ、猛然とやる気がわいてきます。大学に行かない人からも不満が出ないでしょう。

い損になります。そうなれば、自分のレベルから離れた大学にはそもそも入学しようと思わなくなるでしょう。もうひとつ、入学者を適正な人数に抑える方法は奨学金と奨学ローンの活用です。

行が引き受けるかという疑問もあるでしょうが、死亡や破産など個々の貧し倒れのケースは大学がまとめて保証し、必要なら国が債務保証すれば、銀行が引き受けられない理由はないでしょう。こうしたシステムを実現すれば、学生に責任感が生まれ、猛然とやる気がわいてきます。大学に行かない人からも不満が出ないでしょう。

# 入卒時の学力基準を設定、公表せよ

## 現行入試は廃止



え・渡辺 正義

な提言ですね▼

◆大学入試の目的は入学者を決めることです。立派な大学生になる人、卒業して社会に貢献できる人、そして、その分野に適性がある人に来てもらう。そうでない人には考え直してもらおう。しかし、現状ではその目的が果たされていません。入試の難しさが大学の評価を決め、就職のパスポートとなるものおかしなこと。そこで、もっと合理的で学生に負担の少ない制度にすべきだというのが私の主張です。

▲入試をなくすと、一部の大学に学生が集中しませんか▼

◆大学は入学時や卒業時に学生

▲高校入試はどうしますか▼

◆これもなし、その代わりに高校生の学力を検定する資格試験、高検というものを導入すべきだと思えます。これは高校の基礎的な学力を自動車の運転免許試験のような形で調べて、高卒や大学入学の資格を認定するものです。高校中退者やひきこもりの自宅学習者、社会人、あらゆる人にチャンスを開くこともできます。

今は学校間格差というのがあって、あまりよくないとされる高校に入学してしまうと、みんなが

かりしてしまいますが、高検を實現すれば、すべての高校生に目標ができます。それだけではもの足りない人や心配な人はそれ以外の資格を勉強して身につけるとか、将来の仕事や必要に応じてさまざまな授業にチャレンジすればいい。高校側はそういうメニューを学生に対して与えるべきです。

▲小中学校の改革案は▼

◆学区制を廃止すること。学区制がある限り、父母にとって子供はいわば人質です。教育の内容に不満があっても文句を言う方法が

ないし、文句を言えは子供に不利になる。そのため、先生方は親の希望や子供の叫びを聞かなくてもすんでいる。そこには人間と人間の真剣な付き合いはありません。

学区制を廃止することによって、これまでぬるま湯に浮かっていた公立学校の間に競争原理が働くようになります。家庭と学校、生徒と教師の間に互いに選り合ったという信頼関係が生まれ、教育の質が変化すると思えます。

▲国はゆとりを重視した「心の教育」を推し進める方針のよう

です。どう思いますか▼

◆必要なのはゆとりではなく、きちんとして学力を保障することです。入試は学力を保障せず、本人のストレスを増すばかりですから、これを廃止することこそ、ゆとりになります。また、心よりも行動を問題にすべきです。正しい行動は制度がしっかりしていなければ守れません。今は制度が間違っているわけですから、心のせいにはず適切な制度改革を行って、子供の正しい行動を引き出すべきです。

▲家庭教育についてはどう考えますか▼

◆学区制をなくして親が学校を選ぶということになれば、親に責任が生じます。そのうえで親が集まり、その学校をよりよくなるために校長と相談しながらやっていく。こういうつながりができれば親も鍛えられるでしょう。日本の問題点は主婦や老人という地域社会の柱となる人々が、都市生活の中でお互いに切り離されて、協力する場面が持ちにくくなった点なんです。共通の目標と権限、責任が与えられることが大事です。学校の問題は自分の問題だと思えば、そして、自分が動けば学校も世の中もよくなると思えば、力を発揮する人は大勢いるはず。そういう経験の中から家庭教育の立て直しが始まるのだと思います。

# 特集ワイド2

「お客さまは神様です」  
「三波春夫でございませう」

戦後歌謡史に足跡

77歳で死去

「お客様は神様です」「三波春夫でございませう」。徹底したサービス精神で戦後歌謡史に足跡を残した「国民的歌手」、三波春夫さんが14日、77歳で亡くなった。東京五輪、大阪万国博覧会など国民的行事に三波さんの歌声は不可欠だった。晩年まであらゆる分野に挑戦を続け、ポップ音楽に挑む一方で、聖徳太子に関する歴史書を著すなど異才の人でもあった。

徹底したサービス精神

「悲しい時もうれしい時も、みんなが歌える楽しさ」が、三波さんが歌謡曲の世界に転身するきっかけだった。16歳で浪曲の世界に。20歳で陸軍に入り、終戦後、4年間のシベリア抑留生活も体験した。帰国後は再び浪曲の世界に戻り、農村などを慰問して回ったが、57年、歌謡曲の世界に飛び込んだ。万博の際にはリベリア



熱唱する三波春夫さん一名  
古屋御園座で1969年12月

共和国の記念切手にもなった。しかし、「チャンチキおけさ」の大ヒットでまたたく間にスターの座についた。浪曲の語りを生かした「大利根無情」。64年の「東京五輪音頭」や、70年の大阪万博の「世界の国からこんにちは」など、時代の節目ごとに大ヒットがあった。万博の際にはリベリア

国民結束の象徴  
社会学者、橋爪大三郎さんの話 三波さんには、和服を着て都会のビル街で歌っているというようなミスマッチのイメージがある。それを矛盾なくできてしまうのが彼の芸風だった。それは、高度成長期の日本にあった農村と都会、就職組と進学組、中小企業と大企業との大きな矛盾を乗り越え、国民がまとまるため

に必要とした一つの姿を象徴していた。芸術家では岡本太郎、政治家では田中角栄と並ぶ存在で、だからこそ、東京五輪と大阪万博の両方のテーマソングを彼が歌い、成功したのだと思う。

<ヒット・話題曲>

- 1957(昭和32)年 「メノコ船頭さん」「チャンチキおけさ」「船方さんよ」「雪の渡り鳥」
- 59(同34)年 「大利根無情」
- 63(同38)年 「東京五輪音頭」
- 67(同42)年 「世界の国からこんにちは」
- 75(同50)年 「おまんた囃子」
- 92(平成4)年 「HOUSEおまんた囃子」

2001年(平成13年)4月15日(日曜日)

27 12版 早版

"山P260"

# HPの匿名は可? 市長が韓国批判

韓国・釜山市の姉妹都市、山口県下関市の江島潔市長が、インターネットのホームページ上の掲示板に、歴史教科書問題への韓国政府の対応を「内政干渉だ」と「匿名」で問題提起し、論争になっている。民間が運営する地元で人気のホームページで、掲示板利用者の間では、投稿者が市長であることは「常識」になっている。しかし、公式の場で市長が教科書問題に触れたことはない。匿名性の下での韓国批判であり、疑問の声も出ている。

## 下関教科書問題で「主権侵害」と

お名前: AGP E-mail: \_\_\_\_\_

外国の教科書に「修正要求」だなんて、そりゃないでしょ?

キーワード: 歴史教科書

コメントの種類: 苦情 パスワード  コメント削除

慎重に、様々な角度から、色々と論議された結果、正式に文部省の認定を受けた日本の教科書に対して、韓国政府が、あらためて「検閲」を行ない、その結果引っかけられる所があったら日本政府に修正を要求する、という事を韓国政府が発表したそうです。

…が、いくらなんでも、そりゃないんじゃない?  
ちょっとそこまでやったら、主権侵害じゃない?

教科書問題は今年10日、「外国の教科書に『修正要求』だなんて、そりゃないでしょ?」のタイトルで、市長がまず議論を仕掛けた。「新しい歴史教科書をつくる会」主導の歴史教科書の内容に、韓国政府が再修

## 在日関係者「残念だ」

正の公式要求を検討している問題を取り上げ、「主権侵害」などと書き込んだ。ホームページは約4年前に設けられ、数人が運営。地元のインターネット……下関市長が書き込みをしたホームページ

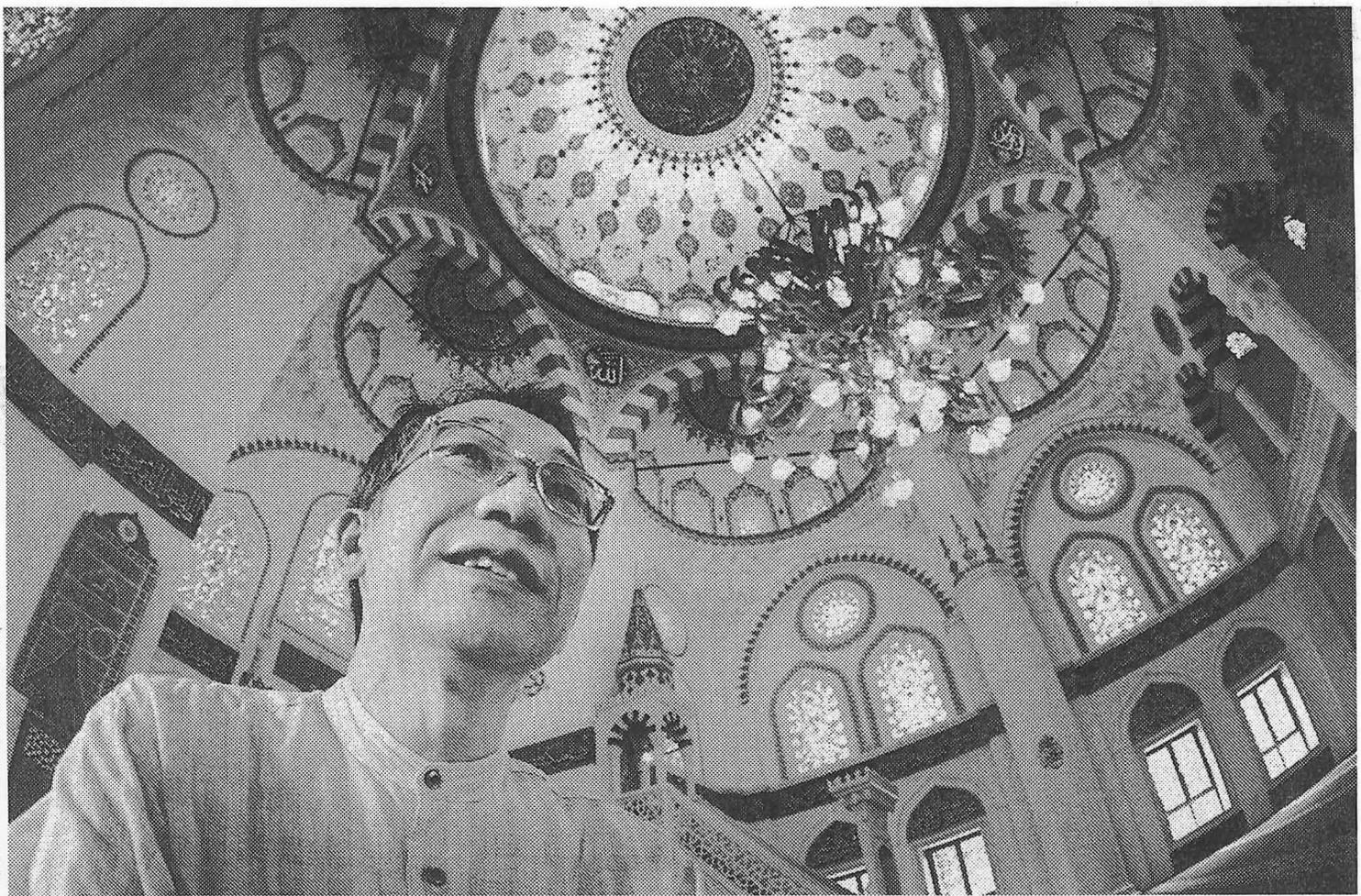
ト利用者の間では有名なサイトで、社会問題から街の話まで情報交換や議論をしている。当初からの会員らによると、江島市長は3年ほど前から参加し、当初は実名で書き込んでいたが、その後、匿名でも投稿するようになったという。現在は市長の本名から「AGP」を使っている。「日本国として責任ある検定を受けた日本の教科書に『内容がケシカランから変更せよ』というのは、どう考えても内政干渉」

「ビビるな! 在日関係者の幹部は「市長は韓国に理解があり、個人的にも好きだった。このテーマにはこれまで約30人が投稿したとみられ、件数は2週間余で120件を超えた。「中」とシヨックを受けている。一方、江島市長は朝日新聞の取材に対し、「市長としてはなく、あくまで個人的なもの。コメントは控えたい」と話している。

市民としてなら  
発言自由だが…

東工大・橋爪大三郎教授(社会学)の話 地域社会の意思決定を任せられた首長は公人であり、その言動は政治的な意味合いを持たない。

「ビビるな! 在日関係者の幹部は「市長は韓国に理解があり、個人的にも好きだった。このテーマにはこれまで約30人が投稿したとみられ、件数は2週間余で120件を超えた。「中」とシヨックを受けている。一方、江島市長は朝日新聞の取材に対し、「市長としてはなく、あくまで個人的なもの。コメントは控えたい」と話している。



「この場所ではイスラム独特の美意識を感じますね」(東京都渋谷区の「東京ジャーミー」で)

土曜文化

橋爪大三郎さん

東京工業大学  
教授・社会学者

私のいる  
風景

異国情緒漂う真新しい尖塔が天を突く。東京・代々木上原に昨年建てられた「東京ジャーミー」は、国内屈指の規模を誇るイスラム教のモスクだ。お香の漂う広い礼拝堂に足を踏み入れると、白い壁と緑色のじゅうたんのコントラストが目前に広がった。天井から大きなシャンデリアが下がり、四方の窓は色鮮やかなステンドグラスが飾

る。「この雰囲気、何かありがたいような気持ちになりますね」東京ジャーミーを訪問したのは初めてというが、都内の他のモスクには、宗教社会学の講座の教え子を伴って何度か見学に訪れている。「教会には個人で行ってみたいという気持ちですが、モスクはあまりないから引率していくんです」

「宗教はそこか怪しい」といった最近の日本人の発想が、世

「宗教」 貧しい日本の知的言論 映し出す鏡

界の常識といかに懸け離れているか。それを真摯な信仰の現場で感じ取ってもらいたいからだ。

宗教こそ人間の営みを読み解く力だと思ふ。

「人生ははかない。でも、この世界には、はかない人生を超えたものがある……。それが何千年もかけて人間が生み出した宗教の言葉です。そこから信頼できる言葉を作り出すという試み、すなわち文明が始まった。政治、経済、法律、すべての根っこに宗教がある」

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

例えば、西欧社会の重要なルールである「契約」を考えてみればよい。背後にユダヤ教やキリスト教で言う「神との契約」が透けてみえる。聖なる言葉を根原に据え、論理を組み立てていく文化がある。「イスラムの法学だって実に論理的なものです」

翻って日本を考える。その歴史は「宗教＝言語」との対決を避けてきた。「儒教を取り入れる」といっても、科挙はやらない。伝来した仏教の教えも、そのままで受け入れない。言葉を信頼せず、ナアナアのゆるま湯的な社会のままでもいいんだ、とや

ってきた。昔はそれで良かったのかもしれないが……」このモスクの空間は、現代日本の大きな欠落を映し出す鏡なのだ、と思ふ。

全共闘世代。学生時代はまさに「政治の季節」だった。自らも七〇年安保闘争に加わった。しかし、挫折。そこで考えたことがあった。

△安保賛成派も反対派も、決して完璧な理屈でこの問題を論じてはいない

「ただ「平和を守れ」と叫ぶだけで平和は守られるか。「戦後民主主義」の言葉も、結局は雰囲気にもまれた人々の無責任な言説に過ぎないのではないか。まるで戦前の軍国主義がそうだったように」

日本社会には、何かまだ語られていない大きな謎がある。そんな疑問を出発点に、社会学者としての独自の歩みが始まった。

はしづめ・だいさぶろう 1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。構造主義や言語学などを背景にした「言語派社会学」を提唱した。著書に『橋爪大三郎の社会学講義』など多数。近著に『世界がわかる宗教社会学入門』（筑摩書房）。

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

「民主主義も現代思想も、みんな外国からの借り物だから、板につかない」。日本の知的言論の貧しさを撃つそんな言説は、アカデミズムからはなかなか認められなかった。二十代半ばから十年ほど、フリーターをしながら論文を書いていた時期もある。しかし揺るがない「覚悟」があった。

論理を武器に異文化に生きる他者と渡り合っていくか否かではないのが、これからの国際化社会。ところが日本には論理を下支えする宗教がない。「自分自身、信仰というものはないんです」。ならば、その空虚さに耐えて、ひたすら自前の言葉を鍛え上げていくしかないのではないか。

宗教論、教育論から、「自衛隊と憲法」「天皇の戦争責任論」といった問題まで、従来の社会学の枠を超えたタフな言論は、やがて高く評価されるようになる。「時代が変わった、というところでしょか」

議論の乏しい風土に新風を吹き込む姿勢は今も変わらない。「学者はプロレスラーよろしくリングの上で暴れるべきなんです。観客にはそれを見てよく考えてもらいたい」穏やかな表情で、しかしキツパリと。異才の「戦い」の日々はまだまだ続く。

文・時田 英之  
写真・竹田津敦史

2001-1-6

# 戦争の死者を どう悼むか

①

日本の人口の7割は戦後生まれだ。戦争体験者は年々少なくなり、死者たちの輪郭もおぼろけになりつつある。戦争が歴史となっていく中、首相の靖国神社参拝はどんな意味をもつのか。そして私たちは死者たちをどう記憶すればいいのか。戦後生まれの二人に聞いた。



靖国神社に参拝する陸軍部隊—1937年

## 犠牲者の実態 数もわからず

戦没者は310万人といわれるが政府の見解だ。盧溝橋事件を発端に日中全面戦争となった37年以降のまもなく、軍人軍属230万人、外地での一般邦人30万人、空襲などによる内地での民間人50万がその内訳だ。軍人軍属には朝鮮半島や台湾

出身者が含まれる。だが敗戦時、多くの書類が焼却されたこともあり、正確な数はわからない。ピョリツァー賞を受けた『敗北を抱きしめて』の中で米国の歴史家ジョン・ダワー氏は「日本政府は、こうした悲惨な事柄については、事実を明言せず、すまそうとする傾向がある」と指摘する。

また死の実態について、歴史家の藤原彰氏は著書『飢死した英霊たち』で「軍人軍属の死者のうち60%強は広い意味での餓死だった」との見解を示している。

日本が被害をもたらしたアジアの犠牲者は2千万人と語られることが多いが、根拠ある数字をあげた研究はほとんどないといわれる。

戦争を知らない世代も増えています。「過去を忘れた国民は国際社会のなかに漂流するだけ。今の日本がそうである。アジアの国々ときちんとした関係をとれない。過去をわがごとくして引き受ける動機を、若い人びとが手にできない」

靖国問題などを含み戦争責任問題の解決は、どうなるのでしょうか。「忌まわしい歴史の過去について、認識が違っても語りかける。語り続けて、新しい関係と信頼を築きたい熱意を相手に伝える。首相も個人として、情と理を尽くして語ればよい。そこからすべてが始まると思う」

小泉首相の靖国神社参拝発言を聞いて、どう思われましたか。

「憲法上問題になる点はないと思う。公式参拝などという概念は存在せず、小泉首相個人が行った。国が維持して、公式に哀悼の意を表する儀式ができた。それが戦後できなかったわけですから、なんとか哀悼の意を表したい、これが戦後の矛盾です。もうひとつ、戦争裁判をどう受け止めるべきか。A級戦犯は有罪になったが、公人として職務を遂

行しただけでも言える。これも矛盾です」

「これはどう解決する。答はまだ出ていない。そろそろ答えを出す

時期ではないか。小泉首相は推察します」

「時代は変わったとらでしよう」

「A級戦犯をめぐる反対もあります」

「A級戦犯で有罪となった人びとは、合法的に戦争をしていて戦勝国から裁かれたので、靖国神社の基準である『国事殉難者』にあたる。だから合祀したというのが、靖国神社の言い分です。国

「極東軍事裁判についてはどうでしょう」

「判決の法理には無理がある。ただ、日本は独立の際、この裁判を認めると約束した。問題性を認識しつつも、判決は承認する。これが、条約上の義務なのです」

# その先の議論、国民は望む

東京工業大大学院教授 (社会学) 橋爪 大三郎さん



「首相の靖国参拝について一定程度国民の理解があるのは、決まりきった保守・革新の対立ではなく、その先の議論が必要

「日本で300万、海外で2千万人が死亡したという。後者の大部分は、日本軍が保護義務を負っていたはずの戦争地域の民間人の死者です。過失ばかりか故意の『虐殺』もある。これは大日本帝国の行為であり、責任の逃れようはありません

「この面は11日を除きしばらく休載し、21日に再開します」

聞き手 企画報道室 (橋爪 高)

# 神奈川新聞

8月9日  
木曜日  
2001年(平成13年)  
神奈川新聞社  
第21261号

〒220-8588 横浜市西区花咲町6-145 電話 045-411-2222

## 日本の針路を問う

21世紀アジアの中で「識者の提言」

■3■

二十一世紀に入りまして、日本とアジアの現状をどう認識しますか。

「東アジアには未整理、未解決の問題が多い。中東と並ぶ危険地域だ。歴史的背景によるもので、すべて日本の責任とも言いにくい。日本が過去を見つめ反省しさえすれば、アジアに平和がやってくるというものでない。そういう発想は裏返しの大東亜共栄圏。思い上がりもはなはだし

い」  
「中国、韓国とのきくしくした関係をどう考えますか。」

「中国と韓国はナショナリズム、アイデンティティーの根幹の部分で、日本の侵略を受けた、植民地にされたということがある。日本人は、ある程度の反日感情を

### 橋爪大三郎さん(社会学者)

覚悟し、そこから出発しなければならぬ。ところが、日本人の贖罪(しよくざい)意識では、日本が適切に行動すれば中国や韓国との反日感情が全部なくなる。と考えている。何か問題があれば、日本のどこかが悪くて反省が足りないからだと、いうことになる。これは非常に不健康な関係だ。そういう日本人がいる限り韓国や中国は非難をやめないし、次のステップに進めない」

「現在の事態でも日本政府は過剰反応すべきでない」ということですか。  
「政府は外国から公式ル  
スコミの造語。参拝は私人の行動だ。閣僚が法事に行くのと同じで法的な問題はない。小泉首相が毎年参拝していたのなら今年も参拝すべきで、首相になったからやめるというのはおかしい」  
「アジアとの関係で問題と耳を傾け、国民に「相手の嫌がることをしなさい」という選択だけではよくない。政府は、固い決意と意思と努力が必要だ。まず自分の意思や主体性をはっきりさせることだ。それによって、お互いに意思や主体性があることが理解でき、それを尊重するにはどうしたら良いか真剣に考えざるを得なくなる。今はそれ以前の段階だ。今回のケース

# 日本の主体性確立せよ



東京都目黒区の東京工業大学大学院 研究室で

「A級戦犯だから悪人、ゆえにA級戦犯を含む靖国神社に参拝するのは悪、という三段論法は、一種の思考停止だ。複雑な戦後の構造を理解する道を開きしてしまっ。そこから先に進めなければ近隣諸国との友好の確立にも失敗する。極東国際軍事裁判が現在も効力を持ち、アジアや中国の民間人に不当な被害を与えたことの責任を日本国が継承しているのは明らかだ。

が、極東国際軍事裁判に収まり切らない歴史的事実がもつとあることも探究し続けなければならぬ」  
(はしづめ・だいさぶろう)  
東京工業大学教授  
終戦記念日取材班

◆靖国神社 1869年(明治2年)に東京招魂社として創建され、後に靖国神社に改称された。明治維新の内戦(戊辰戦争)や西両戦争、さらに日清戦争以後の外国との戦争で倒れた人々を祭っている。戦前は陸海軍の共同管理の下で厚い保護を受け、戦場に向かう人々の心のよりどころとされ、慰霊の中心的施設とされた。戦後は一宗教法

も、短期的にはマイナスでも長期的にはプラスになりうる。国民に議論を巻き起こし、近隣諸国にも日本をより深く理解してもらう契機になればプラスにできる。リスクはあるが先延ばしでは済まされない。虫歯はいつかは抜かなくてはならない」  
「靖国神社の自己改革が必要だ。政府とは無関係な諮問会議をつくり、みっちりの議論

2001-1-10

く 期日通信 全国配信

# 文化

## BUNKA

### この世界のゆくえ

#### 識者3人に聞く

上

世界を揺るがせた米国テロ。事件は冷戦後における国際秩序の大きな分水嶺となるかもしれない。世界は今、どこへ向かおうとしているのか。日本には何ができるのか。三人の識者に聞く。

米国の中枢同時テロを、ブッシュ大統領は「新しい戦争」と呼んだ。だが、東京工業大の橋爪大三郎教授(社会学)は「戦争ともテロとも違う、新しいタイプの危機だ」とみる。

犯行声明が出ていない。ウサマ・ビンラディン氏が首謀者という決定的証拠も示されない。従来型のテロなら、証拠を集めて犯人を逮捕し有罪にすればよいが、今回は実行犯は死亡、黒幕が国外では、不法行為として取り締まりようがない。それなら軍の出番かと言えば、ビンラディン氏が犯人としても、テロ組織は国家でないので、従来型の戦争も仕掛けられない。

今回、米国が報復を即決したのは、犠牲者が大量だから、また、失墜した威信の回復が必要だから、だけではない。「テロ

# グローバル化 貧困加速

橋爪 大三郎さん



はしづめ・だいさぶろう 48年神奈川県生まれ。東大大学院博士課程修了。著書に「世界がわかる宗教社会学入門」「はじめての構造主義」など。

## テロに走る絶望的弱者

やロシアが米国の決断に支持を表明しているのは「かねて手を焼いていた中央アジアのテロ組織をこの際、根絶したい」と考えたためと思われる。

こうしてテロに対する反動の強国連合が形成された形だ。だがこの構図こそ、テロリズムを生む土壌そのものでもある。

核兵器を配備してにらみ合った冷戦体制の崩壊後、グローバル化が進み、情報、資本、技術が速やかに移動し始めた。だが、

その恩恵は米国をはじめとする先進国に集中している。貧しい国々はそのネットワークから疎外され「第三世界」という「監獄」に閉じ込められた人々の鼻先を、こちそうが通り過ぎていく状態」が生まれている。

「貧しい国は、戦争する力もない。そんな人々が抗議する手段がテロ。絶望的な弱者の行動だ」

しかし、テロには未来がない。貧困や不満を生み出す現在の経済システムを、資本、情報、技術、資源を再配分する新たなシステムに構造転換する展望を、テロリズムは語らない。

では、根本的な解決策はあるのか。資源などが再分配され、発展の機会と希望が第三世界にも行き渡るやり方こそ、唯一の道だ」と言う。

グローバル化を無制限に進めず、貿易制限など第三世界の発展を図る優遇措置を講じる。産業と雇用を創出し、競争力をつける。現地語の教育支援を行う。教育と所得を向上させ、人口爆発を抑える。

「テロ根絶」という外科手術とともに、澳方的な「体質改善」を進めることが必要。共に地球を生きるコストを負担する、その先頭を切るメッセージを出すのが、米国ならぬ日本の役割ではないか」



# 小泉政権誕生から半年

小泉純一郎首相が二十六日で就任半年を迎える。分かりやすい単純明快な言葉と、ハンセン病訴訟控

訴断念で見たような思い切った決断で、国民の高支持率は衰えを見せない。しかし、肝心の構造改革について行方を不安視する声も出始めている。街の声を聴いた。

(報道部) 11本記2面、関連記事7面に

井町の農業男性(50)は「靖国参拜問題は悪かった。改革断行に好ましくなかった」と分析した。

◆パフォーマンス

横浜市西区の自営業男性(60)は高支持率の理由を「自分の言葉で話している。大相撲表彰式の『感動した』などがそう」と分析。ただ横浜市の主婦(30)は「政治を詳しく知らない人たちに、パフォーマンスがビジュアル的に受けているだけ」と辛らつた。小泉流のパフォーマンスは、遠からず実績で評価される。

◆期待と不安

構造改革と景気回復への期待は強い。具体的には特殊法人民営化を求める声

# ぬえ見えぬ 衰え 期待の改革

## 「具体的実現ない」 靖国、テロで不安視も

### 靖国、テロで不安視も

◆支持・不支持

現在も改革に対する期待感は根強く、街の声も「支持する」が大半だ。小田原市の団体職員男性(60)は「構造改革、テロ対策に、ポリシーと指導力を発揮して積極的に取り組んでいる」と評価。横須賀市の主婦(40)も「自分の考えを正直に述べている」と語る。しかし不支持に変わったという人も、川崎市幸区の会社員男性(50)は「神奈川県出身という親近感や改革への

期待で支持したが、今は靖国参拜やテロ対策法案など、とても危険ではないかと思っている」。秦野市の会社員男性(50)も「結局は言行不一致。構造改革は掛け声だけ」と手厳しい。

◆半年の業績は

評価としては「ハンセン病訴訟の控訴断念」以外には具体例は挙がらなかった。評価のほとんどは「国民に期待を抱かせるムード

メーカーになっている」「政治を身近にしている」など政治スタイルについてだった。問題点はその裏返しだ。「言葉だけが先走っている」「具体的な改革が実現していない」の指摘が続く。大

てしまう」(10月5日、衆院予算委) ●靖国神社参拜 「靖国神社に参拜することを非難する心情が私には理解できない」(6月20日、党首討論) ●外交姿勢 「日本は自立すべきで日米関係を損なっても他の国との関係で補えはいいという人もいるがそれはあり得

小泉首相の発言は、印象的で単純明快な言葉が特徴だ。しかし、憲法や外交など国の進路を左右する重大問題について、必ずしも十分な論理、哲学を示していないとの疑問も聞かれる。その発言と政治の特徴について、識者二人に聞いた。

(報道部・熊谷 和夫)

### 語録

◆テロ対策法案

「憲法前文と九条の間のすき間、あいまいな点がある。法律的な一貫性、明確性を問われれば答弁に窮す

## 憲法への認識危く／政策面で「球切れ」

駿河台大・杉原泰雄教授(憲法学)の話 テロ対策法案の国会答弁を聞き限り、小泉首相は立憲主義や憲法のことを深く考えたことがない、中身が分かっていないと感じる。政府は、憲法で明確に認められている権限しか行使できないのに、「返答に窮する」「すき間がある」の発言には驚かされる。特に軍事について憲法の制約を無視したのが致命的だ。日本の最大の課題は経済・財政問題だ。構造改革は、どう見ても現状が良くない。ととは思えない。具体的な政策が立ち遅れている。公共事業をどうするのか、特殊法人にどのようなメドを付けるのか分からない。民営化すればいいというような単純な論理では抵抗勢力に勝てないだろう。

東工大・橋爪大三郎教授(社会学)の話 小泉首相は勘がいいが、もともと勉強が不足気味。勘で何とか対応してきたが、今やそうもいかない。政策面で「球切れ」状態だ。歴代首相は、官権と自民党のコンセンサスに従っていたればよかったが、小泉首相はそれに対抗しなければならぬ。前進ではあるが、首相個人の力量では無理。官邸で数百人の専門家が働かなければ対抗できない。ブレインにA案、B案を提案させて決断する。それを国民に詳しく説明するが首相の役目だ。このまま「球切れ」が続けば、国民に愛想をつかされる。構造改革、不良債権問題について、実現可能で先が見える政策を一刻も早く示す必要がある。

第87代総理大臣に指名され、拍手にこたえる小泉純一郎氏

11衆院本会議場、今年4月26日



# 特集ワイド

米国の中枢を狙った同時多発テロ。その先駆けとなったのは、日本赤軍やオウム真理教(アレフに改称)といった日本が生み出した組織による犯行ではなかったかとの見方が出ている。その類似性を取材した。

【高木論】

◆「自爆テロ」の潮流  
「イスラム世界に自爆テロの潮流ができる引き金になったのは、日本赤軍によるテルアビブ・ロッド空港乱射事件ではなかったか」。社会学者の橋爪大三郎・東京工業大学教授は、そう語る。

72年5月30日午後10時半。パリ発のエルフランス機がイスラエルのテルアビブ空港に着し、約300人の乗客が手荷物を受け取るためにいた到着ラウンジで、3人の日本人乗客が突然、隠し持っていた自動小銃を乱射する。死者26人、負傷者70人を超える大惨事だった。犯行に及んだのは世界同時革命を目指し、「パレスチナ解放人民戦線」(PFLP)と連帯するためにレバノンに渡った日

◆「宗教」と「現実否定」  
ウサマ・ビンラディン氏の支援組織「アルカイダ」はアフガニスタンへのソ連侵攻、撤退後の90年ごろ、創設された。その後、次第に非イスラム的と彼らが見なす米国内への反発を見せ、ビンラディン氏は98年2月、「あらゆる場所において米国民と彼らの同盟者を殺害することが全イスラム教徒の義務である」との声明を発表している。

「地下鉄サリン事件も今回のテロも実行犯には高学歴のエリートが多く含まれている。彼らには現実の世界で正当に評価されていらないとの不満があり、現実を否定するものとして宗教という選択肢があった。それが、現実社会を破壊してもかまわないとの感覚を生んだ」と、元日本女子大学教授の島田裕巳氏は

本赤軍幹部だった奥平剛士、安田安之の両メンバーと、岡本公三容疑者―同事件で国際手配。このうち、奥平、安田両メンバーは現場で自爆した。「2人の自殺は手りゅう弾を自分の首に当て、爆発させる方法だった。指紋と顔を吹き飛ばす目的があったのだろうか、まったく同じ死に方をしているのが実に不気味だった」。当時、警察庁警備局の幹部として事件処理にあたった元内閣安全保障室長の佐々淳行氏は、そう振り返る。

彼らはなぜ、自爆テロという手段を選んだのか。日本赤軍の最高幹部だった重信房子被告は

## その類似性と影響をさぐる



炭疽菌入りの郵便物処理を想定した東京消防庁のテロ災害訓練で防護服を着て活動する化学機動中隊。東京都渋谷区幅ヶ谷で8日午前、松田嘉徳写真

著書「わが愛わが革命」(講談社)で、彼らが自爆テロを思い立った心情を次のように記している。同志だった連合赤軍によるリンチ殺人が72年3月に発覚、その直後、重信被告のサポートに奥平幹部(アラブ名・パシム)たちが集まった時の描写である。

「真の死に方、真に革命的な死に方とは何か。自分が死ぬことを避けて通っている限り、殺すことは間違いである。殺すというものは自分の死を代償とする以外にはあり得ないのだ。そのことを日本の仲間たちはわかっている。駆け付けてきたパ

シムたちは黙って下を向いて、同じように同じことを確かめ合った」

結果的に行われたのは「人命を軽視しながら、恍惚感に浸るような自己中心的な無差別殺人」(佐々氏)だったが、この作戦はアラブ・イスラム世界の過激派、とりわけ、PFLPのメンバーたちに鮮烈な印象を与えた。「わが愛わが革命」には「PFLPのメンバーたちはその闘争こそ、自分たちが党派を組織して以来、最もやりたかったことだけれど、だれもできなかった闘争だ、とすごく感動した」と記されている。

# 同時テロと日本赤軍とオウム

宗教学者の立場から両者の類似性を指摘する。

静岡県立大助教授(イスラム地域研究)の宮田律氏も「宗教」と「現実否定」をキーワードに挙げ、「今回のテロの実行犯は、人は何人も生まれ変わるというイスラムの死生観や殉教意識に勇気を得ていただろうし、彼らの多くは欧米で暮らした経験を持っており、そこで感じた疎外感が現実社会への否定的な感情を募らせたのだと思う」と話す。

オウムが武装化の道を進み出すきっかけを島田氏は「88年9月下旬ごろに富士山総本部道場で行った騒ぎ出した信者の顔面を水槽の水につけさせたりしているうちに、死にさせた事件だ。オウムは当時、宗教法人化に向けて、東京都と折衝を行っていた。表裏にならば、不利にな

ると判断した松本智津夫(麻原彰晃)被告は死体を秘密裏に処理させた。これが一つの転機となり、最終的に霞が関という日本の中枢部を標的にした地下鉄サリン事件につながった。

「ただし、そこまでの経緯は非常に複雑で、『狂信的な教祖と妄信する信者』という図式では説明しきれない部分がある。松本被告が教義を作って殺人を宗教的に正当化したのは事実だが、指令がなくても、幹部たちが意向をくんで、動く場合もあった。それぞれの思いや行動が複雑に絡まり合って、そこに引き着いた」と島田氏は話す。

爆破事件で起訴され、追い詰められていたとみることも可能だ。が、宮田氏はその点については「過去に起きたイスラム過激派のテロは時間的間隔があいており、今回も単に準備が整った段階で実行されたとみるべきだろう」と否定する。

◆拡大するテロの温床  
70年のよど号ハイジャック事件、72年のテルアビブ空港乱射事件、74年の三菱重工ビル爆破事件、そして、95年の地下鉄サリン事件。日本社会は戦後、驚異的な経済発展を遂げる一方で、数々のテロを経験してきた。今、何が求められるのか。

佐々氏は言う。「日本は今もテロの根を刈り取っていない。日本赤軍の一派はまだ捕まっていないし、オウムに対する破壊活動防止法の適用は見送られた。重信被告は指名手配後も出

入国を繰り返していた。まず、足元にある根を絶つ方策を考えるべきだ。現状では「準テロ支援国家」と指摘されても仕方がない」

そんな状況も踏まえ、橋爪氏は「21世紀はテロリズムの時代になる恐れがある」と警鐘を鳴らす。「20世紀後半以降、テロを生む温床は確実に拡大化している。資本主義が社会主義を圧倒し、持てる者と持たざる者との格差が広がった。第三世界の国々が正面から先進国に対抗するのはまず不可能だし、社会の中で希望や出口を見いだせない人たちが、宗教的な粉飾を帯びたカリスマの下でテロに走る可能性は否定できない」

同時多発テロの発生から間もなく2カ月。軍事報復が長期化する中で、炭疽菌テロの被害と不安は日に日に拡大している。

◆米国の民間会社から入手  
オウムとの類似性が取りざたされるようになったのは、炭疽菌によるバイオテロが米国で発生してからだ。オウムがかつて、炭疽菌の噴霧実験に手を染めていたためだ。

実験は98年6月から7月にかけて、東京都江東区亀戸にあったオウムの新東京総本部道場で異臭騒ぎが起きたことでも発覚した。屋上から鼻をつく刺激臭が広がり、その範囲は半径1キロにも及んだ。教団側は当初、原因を明らかにしなかったが、一連の裁判の中で教団幹部らが「炭疽菌の噴霧実験が原因だった」と証言、上祐史浩幹部も10月14日付のホームページで、教団による実験の事実を認めている。

オウムはこの炭疽菌をどこから入手したのか。実は米国の民間会社から購入したものであることが、今年6月、米国メリーランド州で開かれた国際炭疽菌会議で、北アリンナ大のポール・カイル教授によって明らかにされている。異臭騒ぎの後、江東区役所は現場屋上の洗浄液を入手・保管していたが、99年秋になって国立感染症研究所に保管と調査を依頼した。同研究所は北アリンナ大に共同調査を依頼し、そこでDNAを分析した結果、米国の会社が販売していたワクチンと同一であることが判明した。同研究所の担当者は「家畜のワクチン用に無毒化されたもので、当時は通信販売で簡単に入手することが可能だった」と説明する。

防衛庁の「生物兵器への対処に関する懇談会」の委員を務めた帯広畜産大学の牧野壯一助教授(細菌学)は「予防演習として無毒な菌を散布したというよりも、菌に関する知識不足だったのではないかと指摘する。

# 敗北を抱きしめて

## 第二次大戦後の日本人

三浦陽一  
高杉忠明  
田代泰子

ピエリッツァー賞受賞作



岩波書店

四六判・平均476頁  
本体各2200円

●世界でも類を見ない苦しい敗北を経験した日本人が「敗北を抱きしめて」自分を変えていく姿を、共感をこめて描く。(天声人語/朝日新聞7/1)

●戦後史の根源的な問いに明晰な解答を与えてくれる優れた史書である。池澤夏樹評/毎日新聞7/1

●戦後を、生身の人間が織りなした濃密な歴史のページとして、眼前に再現してみせてくれる。(橋爪大三郎評/日本経済新聞6/24)

【大/反/響/増/刷/出/来/】

●ともすれば情緒と憶断に傾斜しがちな風潮に反省を強いる意味でも、味読すべき、価値ある一冊。(匿名批評/時事通信電信)

●本書を読んだ人は、まるでバルザックの小説を読み終えた後のように、ここで登場する占領期のアメリカ人や日本人の素描を、何度も思い出すことになるだろう。(藤原健一評/中央論8月号)

●近年にない日本現代史の傑作である。(加藤彰評/エッセイスト7/1)

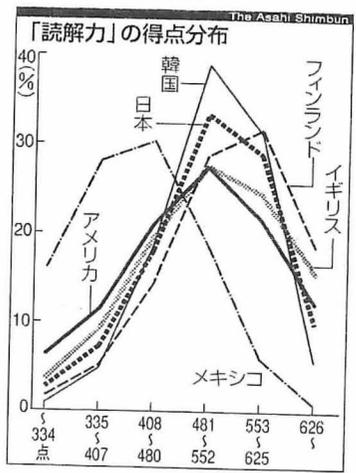
●様ざまな可能性を含んだ、錯綜した占領期日本の現実をありありと読者の前に再現した。(石田雄評/季刊現代)

●これだけ生き生きと書かれた「日本占領史」は他にないし確信します。(東京新聞分等市・牛山政一)

●過ぎ去ったこの時代の動きが実に丹精に描き出されている。感銘をあたえた佳作。(新潟県新報市・菅川英二)

### 理数系は上位

調査は32カ国(OECD加盟は27カ国)の15歳男女約26万5千人を対象に実施した。統計の意味



を讀みとつたり、広報のレイアウトを考えたたり、教科の試験とは違う問題が並んだ。記述式の問題も半数を占めた。重点的に調べた読解力

は27カ国の中で8位。得点を6段階に分けてみると、日本は中間層が多い。補足的に調べた数学的分野では1位、科学的分野では2位だった。「上々の結果」と文部科学省。

ただ、日本の子どもは記述式の問題で、何も書かない無解答が多かった。欧米の子どもがたとえ間違っても解答を書いているのは対照的。学校の勉強や読書時間は最低水準だった。

## 学力偏重 足かせに

東工大教授(社会学)  
橋爪大三郎氏



今回は1回目の調査なので、学力がますますだから安心と、軽々に判断すべきではない。15歳は、日本の得意な義務教育の直後で、このぐらいの高得点は当然である。今後は、意欲を高めるために、分かる授業を第一

に考えるべきだ。「学力低下」が叫ばれる背景に親の高学歴化がある。子どもへの期待が高く、こんなことも出来ないのかと不安になる。昔のように家業を継がせるのなら学力は関係ないが、サラリーマンには一大事。「低下」の真偽はさておき、「心配だ」という言説が受け入れられる素地がある。

もともと日本や韓国、中国などには、学力を伸ばすのは親の務めで、どんな子ども教えれば伸び、それが幸せにつながるという考えが強い。科筆のように、試験で社会階層が作られ、学力を重視してきた歴史がある。

## 日本の高1 国際学習調査で好成績

# 「考える力」本物ですか？

日本の高校1年生が、経済協力開発機構(OECD)の学習到達度調査で好成績を収めた。調査は、生活の中で知識を生かせるかを測った。「応用力や思考力が弱い」と言われてきただけに、「案外いい」という見方も広がっている。3人の専門家に、この結果をどう考えたらいのかを聞いた。(山田 裕紀、森北 喜久馬)

各分野の平均点順位

国	順位
フィンランド	546
カナダ	534
ニュージーランド	529
オーストラリア	528
アイスランド	527
韓国	525
イギリス	523
日本	522

【数学的分野】

国	順位
日本	557
韓国	547
ニュージーランド	537
フィンランド	536
オーストラリア	533
カナダ	533
イスラエル	529
イギリス	529

【科学的分野】

国	順位
韓国	552
日本	550
フィンランド	538
イギリス	532
カナダ	529
ニュージーランド	528
オーストラリア	528
オーストラリア	519

(いずれも上位8カ国)

識者に聞く

だが、学力重視は才能解視につながる。才能ある子を埋にはめるので、独創的な天才が育ちにくくなる。中国、台湾では大学から才能重視のアメリカに移る例が多い。学力重視一点張りでは行き詰まるばかりだ。